

当院における Brugada 症候群に対する 心外膜アブレーション

上久保陽介¹ 因田恭也¹ 安藤萌名美¹ 神崎康範¹
伊藤唯宏¹ 水谷吉晶¹ 加藤寛之¹ 藤井亜弥¹
森島逸郎² 柳澤 哲¹ 平井真理¹ 室原豊明¹

Brugada症候群では心室細動(VF)を繰り返す症例があり，VFのコントロールにはキニジンやイソプロテレノールなどの薬剤投与およびカテーテルアブレーションが行われる．カテーテルアブレーションでは，VFのトリガーとなる心室期外収縮や右室心外膜側の不整脈基質がターゲットとなり，近年，Brugada症候群の心外膜側不整脈基質に対するアブレーションの有効性が相次いで報告されている．当院では2012年10月～2015年8月に，6例のBrugada症候群患者に心外膜アブレーションを施行した．全例が男性で，年齢は20歳～67歳，全症例が植込み型除細動器(ICD)植込み後であり，そのうち5例でVFに対するICDの頻回作動を認めていた．右室心内膜側および心外膜側のマッピングを施行，全症例で右室心内膜側では異常電位や低電位領域は認められなかったが，心外膜側，特に右室流出路前面に異常電位および低電位領域を認めた．ピルシカイニドを負荷して，再度心外膜側異常電位領域をマッピングし，ベースラインおよび薬剤負荷下で異常電位を記録した領域(10.1～26.3 cm²)に対して，異常電位の消失をターゲットとしてアブレーションを施行した．アブレーションに伴う重篤な合併症は認めず，5例でアブレーション後にVFが誘発不能となり，これらの症例ではBrugada心電図の消失が得られた．アブレーション後6～39ヵ月のフォローアップ期間中に，VFの再発は全例で認めていない．Brugada症候群の不整脈基質に対する心外膜アブレーションはVFの再発抑制に有効であると考えられ，今後長期成績を含めたさらなるエビデンスの蓄積が必要である．

Keywords

- Brugada 症候群
- 心室細動
- 心外膜アブレーション

1名古屋大学大学院医学系研究科循環器内科学
(〒466-8550 愛知県名古屋市昭和区鶴舞町65番地)
2大垣市民病院循環器内科

Epicardial Catheter Ablation for Brugada Syndrome in Nagoya University Hospital

Yosuke Kamikubo, Yasuya Inden, Monami Ando, Yasunori Kanzaki, Tadahiro Ito, Yoshiaki Mizutani, Hiroyuki Kato, Aya Fujii, Itsuro Morishima, Satoshi Yanagisawa, Makoto Hirai, Toyooki Murohara